

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

中級日本語文法テクルとヨウニナル： その理解促進と教授法の課題に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-11 キーワード (Ja): 日本語教育, テクル, ヨウニナル, 中級日本語 キーワード (En): 作成者: 向井, 絵美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000351

中級日本語文法テクルとヨウニナル ーその理解促進と教授法の課題に関する一考察ー

向井 絵美

要旨

本稿では、関西外国語大学の中級前期コース Japanese 5 で教える二つの文法項目「テクル」と「ヨウニナル」について考察する。筆者は 2022 年秋学期に本学に着任以来、途中の一学期を除き、このレベルを担当している。担当し始めてまだほんの数年に過ぎず、限られた経験ではあるものの、筆者から見て学生が使い分けに苦労していると思われる文法項目がテクルとヨウニナルである⁽¹⁾。また、筆者自身も教える時に難しさを感じている。授業では学生のレベルに合わせて簡略化した内容を教えているが、学生にさらに問われた際に文脈に応じた適切な使用法を説明できるようになるため、将来的に母語話者・日本語教育者として筆者自身がこれら二つの文法項目を分析し、もっと深く理解していく必要性を感じている。本稿はそのためのパイロットスタディであり、テクルとヨウニナルの異なる文脈における容認性を観察し説明を試みる。

【キーワード】 日本語教育、テクル、ヨウニナル、中級日本語

1. はじめに：テクルのアスペクト形式と一般的な教授法

時間を表す文法形式の中には、動きの展開の様々な局面（または段階；例えば開始、継続、終結等）や、動作や状態の変化の様相（例えば完成した動作・状態か、不完成か、進行中か等）を表すものがある。そのような文法形式は「アスペクト」と呼ばれる⁽²⁾。

英語話者の日本語学習者にとって、日本語のアスペクト形式は時に習得が難しい

ようである。そのようなアスペクト形式の一つに、テクルがある。テクルには、(1)のような主体や対象が実際に移動する空間的 (spatial) な用法と、(2)のようなテ形となっている動詞が表す動作が過去のある時点に始まり、今もその状態が続いているということを表す時間的 (temporal) な用法があり、後者がアスペクト形式になる。

(1) テクルの空間的な用法

- a. 昼ご飯を食べてきました。
- b. 駅前のケーキ屋でバースデーケーキを買ってきて。

(2) テクルの時間的な用法 (アスペクト形式)

- a. 観光客が増えてきました。
- b. 少しずつ新しい環境にも慣れてきたと思います。

テクルは日本語能力試験 (JLPT) の N3 または N4 の文法とされており、中級レベルのクラスで導入されることが多い文法である。例えば、中級レベルの教科書『上級へのとびら』では、テクルは第3課で導入され、時間的な用法に関しては以下のように説明されている。

(3) 『上級へのとびら』第3課 文法項目⑨ (pp. 70-71)

V-te くる is used when an action appears to be directed toward the speaker[.] (中略) V-te くる often indicates that an action or process began in the past and is continuing in the present, or that something has begun to take place[.]"

(和訳: 「V-te くる」は話者の視点から見た動作の時間的なまたは空間的な方向を示す。「V-te くる」は、動作が話者に向かって行われるように感じられる場合に使われる。(中略) 「V-te くる」は、動作や過程が過去に始まり現在も続いていることを示す場合や、何かが起こり始めたことを示す場合に使われる。)

ただし、このような説明だけの場合、学生がよくしてしまう(4)のような誤用に対して説明が容易にはできないという問題がある。

- (4) よくある誤用（「日本に来て日常生活において何か変化がありましたか。」という（趣旨の）質問に対して）
- a. #よく日本語を話してきました。
 - b. #よく勉強してきました。
 - c. #よく日本の食べ物を食べてきました。

したがって、たいいていの場合、上述のような説明に対して、テクルの時間的用法では、使える動詞は変化を表すものに限るという説明を授業内で加えて教えている場合が多いようである。

2. 本プログラムの Japanese 5 におけるテクルとヨウニナル

本学の Japanese 5 でも新出文法項目としてテクルを以下のように導入しているが、そこにはテクルは変化を表す動詞とともに使われるということを明記している⁽³⁾。

(5) 本学 Japanese 5 の教科書『中級の日本語』 Unit 1, 文法表現 5

"~てくる is generally used in the form of ~てきた and it describes a change that has occurred over time and has reached the current state in the present. This expression is used with verbs that indicate change, such as 変わる (*to change*), 増える (*to increase*), 減る (*to decrease*), 慣れる (*to get used to*), etc."

(和訳：テクルは一般的にテキタの形で使われ、時間の経過とともに起こり現在の状況にいたった変化を表す。この表現は、変わる、増える、減る、慣れるのような変化を表す動詞とともに使われる。)

上記の説明を考慮すれば、(4)の発話が質問の答えとして不自然なのは、テクルが「時間をかけて進行する変化」を表すアスペクト形式（時間的な用法）として使われているのに対して「話す」「勉強する」「食べる」という動詞がそういう動詞ではないからだと説明できる。

一方で、学生が意図した内容は「以前はそうではなかったが、今は習慣としてよくするようになった」ことを表す時に使うヨウニナルを使用して(7)のように表すことができる⁽⁴⁾。

(6) 本学 Japanese 5 の教科書『中級の日本語』 Unit 4, 文法表現 4

"～ようになる is commonly used in the form ～ようになった, and (中略) [w]hen used with the present affirmative form, it indicates that an action represented by the verb has become a habit or custom in the present, which was not the case before.

(中略) In Unit 1, we learned that when using ～てくる to illustrate a gradual change over time, it often pairs with verbs that indicate a process, such as なる (become), 慣れる (get used to), 増える (increase), and 太る (gain weight). On the other hand, the verbs that come before ～ようになる are typically those with a clear starting point, like 食べる (eat) or 飲む (drink). Hence, verbs indicating a gradual change can sound unnatural when used with this expression."

(和訳：ヨウニナルは一般的にヨウニナッタの形で使われ、(中略) 現在肯定形の動詞とともに使われた場合、動詞が示す行動が、以前はそうではなかったが、現在では習慣や慣例として定着してきたことを示す。(中略) Unit 1 では、時間をかけて進行する変化を表すテクルを使う場合、しばしば「なる」、「慣れる」、「増える」、「太る」などの過程を示す動詞と一緒に使われることを学んだ。一方、ヨウニナルの前に使われる動詞は、通常、「食べる」や「飲む」など、明確な始まりがある。したがって、[(Unit 1 のテクルと使うとされた)]時間をかけて進化する変化を表す動詞はこの表現[(=ヨウニナル)]と一緒に使われた場合、不自然に聞こえることがある。)

(7) 正しい答えの例（「日本に来て日常生活において何か変化がありましたか。」という（趣旨の）質問に対して）⁽⁵⁾

- a. よく日本語を話すようになりました。
- b. よく勉強するようになりました。
- c. よく日本の食べ物を食べるようになりました。

このようなテクルとヨウニナルの説明(5)と(6)は、日本語 5 の履修生に合わせ、あえて簡略化されているが、このレベルの学生にとってはどちらも必要十分な説明だと言えるだろう。

3. テクルとヨウニナルの観察と分析

ここまでではテクルとヨウニナルを中級レベルの学生に教える場合を想定して話を進めてきた。しかし、筆者はさらに網羅的に観察を続ける必要があると感じている。例えば、「話す」「勉強する」「食べる」は(4)のような質問に対する答えとしては不自然であったが、テクルとともに使ってアスペクト的意味（時間的用法の意味）を持たせること自体は不可能ではない。

- (8) a. 日本に移住して以来、地元の人々とたくさん話してきました。
- b. 大学では4年間、日本語を勉強してきました。
- c. 私は食べるのが趣味で、これまでにいろいろな食べ物を食べてきました。

この(8)の例文において、使われている動詞は(4)と同じであるにもかかわらず、これらは極めて自然な日本語だと言えるだろう。

では、(4)との違いは何であろうか。(4)では質問文が「日本に来てから」となっており、日本に来る以前と来た後の間の比較的短い時間に起きた変化について聞いている質問であった。一方、(8)では「日本に移住して以来」「(大学に入学して以来)4年間」「これまでに」がカギとなっているようである。このような表現が長い時間に起こった変化であることを示唆しており、そういう場合には、たとえ動詞自体がそれだけで変化を表す動詞でない場合でも、変化の意味が派生し、時間的用法のテクルと共起できるようになると思われる。

次に、「緊張する」「太る」「慣れる」について考察する。これらは「変化を表し、テクルの時間的用法と使える動詞」として Japanese 5 の教科書『中級の日本語』Unit 1 で学生に紹介する。

- (9) a. 明日スピーチだから、だんだん緊張してきちゃった。(Unit 1, 12)
- b. 最近運動不足で太ってきました。
- c. 日本の生活にだんだん慣れてきました。(Unit 1, 12)

これらは（多少文脈の調整は必要であるものの）ヨウニナルとともに使っても何も問題はない。

- (10) a. 大学に入学して以来、人前で緊張するようになりました。
b. 最近、ほんの少し甘いものを食べるだけですぐ太るようになりました。
c. ?昔は新しい環境になじむのに時間がかかるほうでしたが、今はどんなことにもすぐに慣れるようになりました。

そのため、上の(7)に挙げたヨウニナルの説明の最後に"verbs indicating a gradual change can sound unnatural when used with this expression [=ヨウニナル]."としたのは、上で述べたように、このレベルの学生が過剰に不自然な文を作ってしまうための妥当な説明ではあるものの、この学生たちがもっと自然な日本語話者に成長していくために、その学習のどこかの段階で補足説明が必要だと思われる。

ここで注目したいのは、「緊張する」と「太る」の例(10a)と(10b)は自然なのに、(10c)の文頭の「？」マークが示唆するように、「慣れるようになる」が自然に使える文脈を作るのは特に難しいという事実である。「緊張する」と「太る」の場合は、これらが繰り返される文脈を作るのは簡単である。例えば、土曜日の朝「緊張した」という状態になった後、その日の夜には緊張はほだけ、月曜日の昼頃さらに「緊張した」という状態に戻ることはいくらかでも想像できる。このような理由から、これらをヨウニナルとともに使える文脈は設定しやすいと思われる。

それに対して、「慣れる」の場合は、一度特定の何かに慣れた後、それをリセットして慣れていない状態にすることが難しい。例えば、日本の生活に慣れた後にまた日本の生活に慣れていない状態に戻るのは難しい。したがって「日本の生活に慣れる」ことを何度も繰り返すことは不自然なため、「日本の生活に慣れるようになった」は容認性が極めて低い文となる。一方、(10c)の例文はあえて「(何とは特定していない)何かに慣れる」という文脈にしてあり、このような時は、「何か新しいことに慣れる」ということを何度も繰り返すのは完全に不自然ではなくなるのである。

以上のテクルとヨウニナルについての考察を再度まとめる。(A) 動詞自体がそれだけで変化を表す動詞でない場合でも、長い時間の変化であることを補足する表現が文中にあれば、時間的用法のテクルと共起できるようになる。(B) 変化を表す動詞は、何度も繰り返される習慣として定着してきたという解釈が可能な文脈が想定できれば、ヨウニナルと共起しても自然に解釈されうる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、中級レベルの日本語で導入するテクルとヨウニナルについて考察した。まず、現在 Japanese 5 でこれらをどのように教えているかを説明し、次に、その説明では扱えない例を考察し、分析した。

当然ながら、テクルとヨウニナルという二つの文法をはじめて学習する中級レベルの日本語学習者には、このような踏み込んだ日本語の直感的な内容を教える必要はない。しかしながら、この学習者たちと接していく日本語教師にとっては、日本語話者としての直感を研ぎ澄まし、問われれば対処できるような準備をしていく必要があると考える。ただし、最初に述べたように、本稿の内容はまだほんの初期段階である。今後、先行研究を十分に精査した上で、動詞の種類を網羅的に見ながら様々な文脈における容認性を考察し、本研究を発展させる予定である。

注

- (1) テクルと対になる文法としてテイクがある。この二つの違いは、「来る」と「行く」の違いであり、「空間的な用法」(本文中の例文(1)) 言えば、テクルは移動方向が話者に向かい、一方テイクは移動方向が話者から遠ざかる。一方、これを「時間的な用法」(同じく例文(2)) の観点から言った場合には、テクルがある時点までの事態を問題とし、テイクはある時点以後を問題としているという違いになる。このような違いがあるものの、本稿では話を簡略化するためにテクルにのみ絞って話を進める。
- (2) 本稿のアスペクトの定義における文言は、工藤 (1995, iii) と益岡・田窪 (1992, 111) に基づいている。
- (3) これは、2023 年秋学期から本学の中上級コース全体で行ってきた教材開発の一環として使用を開始した『中級の日本語』からの抜粋である(このプロジェクトについては高屋敷ほか (2025) を参照されたい)。しかし、テクルは変化を表す動詞とともに使われるという注釈は、それ以前に Japanese 5 で使用されていた旧版の教科書『日本語⑤』でもすでに付与されていたもので、新教科書ではこの記述を踏襲したものになっている。
- (4) ヨウニナルは Unit 4 で導入される新出文法のため、Unit 1 の段階でこのような内容を日本語で話したいという学生には Unit 4 まで待ってもらうことになっている。
- (5) ヨウニナルとテクルを組み合わせで「ようになってきました」とするのもちろん可能であるが、本稿では話を簡略化するため、ヨウニナルはヨウニナル単独で使うこととする。

参考文献

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房

高屋敷真人・西郷英樹・倉沢郁子・向井絵美（2025）「関西外国語大学留学生別科
日本語科の統一シラバス作成に基づいた中上級日本語教材の開発」『第 11 回 IRI
言語・文化研究フォーラム予稿集』, 79-88.
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版

参考教科書

岡まゆみ・近藤純子・江森祥子・花井善朗・石川悟（筒井通雄（監修））（2009）
『上級へのとびら—コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語：TOBIRA
Gateway to Advanced Japanese Learning Through Content and Multimedia』くろしお出
版
関西外国語大学日本語プログラム Japanese 5 教科書『日本語⑤』（未出版、プログ
ラム内利用に限る）
関西外国語大学日本語プログラム Japanese 5 教科書改訂版（2023）『中級の日本語』
（未出版、プログラム内利用に限る）

(emimukai@kansai-gaidai.ac.jp)